

桜井・脇本遺跡 5世紀後半、石積み遺構

石積み遺構は東西約30メートルにわたって出土した。幅は約2〜2.5メートルで、高さは約1.1メートル。直径約20〜30センチの石を、緩やかな傾斜状に積んでいた。

雄略天皇（5世紀）が造営した「泊瀬朝倉宮」の推定地とされる奈良県桜井市の脇本遺跡で、5世紀後半の石積み遺構が出土し、県立橿原考古学研究所が24日、発表した。橿考研は、雄略天皇の宮殿の関連施設で、防衛を兼ねた空堀（水のない堀）の可能性があると述べている。



雄略天皇宮殿の空堀か

この南側には初瀬川が流れており、今回出土した石積み遺構は、堀などの南端とみられる。

石積み遺構の北側には、平らに整備された形跡があったが、橿考研は、土の分祈などから雄略天皇の宮殿が管理した水のない空堀とみている。

脇本遺跡は、奈良盆地から東海地方に通じる交通の要衝にあり、飛鳥時代以前の古代天皇の宮殿が集中したとされる三輪山の麓に位置している。

石積み遺構について、和田萃（あづま）・京都教育大名督教授（古代史）は「宮殿を囲む防衛を兼ねた、大規模な堀の一部だろう。威容を誇る視覚的な効果も考えて築かれたのではないかと話している。現地説明会は29日午前10時から行われる。近鉄大阪線大和朝倉駅から北東に徒歩約15分。

同遺跡では、今回見つけた石積み遺構の北東側で、泊瀬朝倉宮の一部とみられる5世紀後半の建物跡も出土している。



脇本遺跡で発掘された5世紀後半の石積み遺構
—24日午前、奈良県桜井市（門井聡撮影）